

前代未聞、音声中心主義

川口茂雄

1 聴き取りえない差異——ハイデガーの講演テキスト？

ドイツで四半世紀を越えて続々と編集刊行されてきたクロスターマン版ハイデガー全集。この全集のそれぞれの巻には短い「編者後書き」が付されていて、その巻の底本がなにかであったのか（ハイデガーの手書き草稿、タイプライターに転写された原稿、また講義受講者のノート、等々）が、ごく簡単に紹介されている。時に簡単にすぎる場合もあり、研究者にとっては（文献学的な正当性の面で）いささか気になる点ではある。実際、ハイデガー全集の邦訳書では、「編者後書き」の不備について訳者の指摘が付記されている場合も少なくない。

あるとき私は、ハイデガー全集の第七九巻『ブレーメン講演とフライブルク講演』（この巻は森一郎訳の邦訳書でご存じの方も多いただろう）の編者P・イエーガーによる「編者後書き」を読んでいた。ブレーメン講演は一九四九年一月に行われた四つの連続講演で、第二講演と第三講演が公式に活字化されるのは今回の全集版が初めてであり……、といった経緯の紹介説明の後に、以下のようなことが記してある。

この巻に掲載されているテキストすべてにおいて、ハイデガーの独特な書き方 (eigentliche Schreibweisen Heideggers) は維持されている。彼の書き方が該当する正書法に違反している場合であっても、表記に揺れがある場合であっても、維持された。後者の場合はとりわけ「Sein」と「Seyn」という書き方の事例にはまる。これらは——すでに「著者の生前に、部分的に」公刊されていた諸テキストのようにではなく——「Sein」という書き方に統一はされていない。(GA79 179-180)

色々編者も大変そうだ。そのくらいの感想を、最初、私はもった。手書きの原稿を解読する困難。そして、ハイデガーがSeinという表記をどういうときに使つてどういうときに使わないか(同一論稿内のどの箇所であるかは、年代上のいつの時期に)の判断可能性・不可能性。

しかし少々時間をおいて冷静に考えてみると、この「編者後書き」はなにかいうべきことをいついていないようにも思えてきた。なにか足りない。編者が苦心したことはよくわかった。だがブレーメン講演は、講演である。講演は講演者の声で、音として聴かれる。講演者が手にもっている原稿中の「Sein」(存在)と「Seyn」(俯在)との文字上の表記の違いがどうあれ、その違いは、聴き手にはわからないのではないか。講演会場の聴き手たちには「ザイン」としか聴こえない。その差異は聴こえないのではないだろうか。

間違はなく、書き手にして講演者であるハイデガー自身は、SeinとSeynとが音声上区別できないことをわかつていた。わかつていて使つていたのだ。鼓膜に響かないその同音異字を。

——そしておそらく、ハイデガー本人だけでなく、ジャック・デリダもまた、このことを把握してははずである。

ではここで、本稿のテーマをごく簡略に定めよう。テーマは、差異と音と現われである。さて、SeinとSeynという表記が提示しているのはなにか。それは、書かれた言葉と語られる言葉との差異である。エクリチュール

(書かれた文字) と、パロール(語られる言葉) ないしフォネー(声) との、差異である。

2 デリダが指摘する「音声中心主義」

「自分が語るのを自分で聴く」とは——「フォネー」が隠蔽している差異、文字、音素

ここでデリダのほうに話を移すことにする。すなわち、エクリチュール、パロール、そしてフォネー *phoné* についてデリダ(特に前期デリダ)が論じていたこと。

一九六七年にデリダが立て続けに刊行した諸著作のなかで、とくに『声と現象』と『グラマトロジーについて』では、西洋哲学・西洋の形而上学における「音声中心主義 phonocentrisme」すなわち「現前の形而上学 *métaphysique de la présence*」を指摘するというのが中心的モチーフになっていた。

少し端折つてただちに核心に入ることとしよう。『声と現象』および『グラマトロジーについて』でデリダが指摘したのは、なにか。それは「フォネー(声、音)」。古くは古代ギリシア以来、中世・近世・近代を経て現代にまでいたる西洋の形而上学(の歴史)を支配している、「形而上学の歴史全体に含意されている、フォネーの必然的特権」(VP 15)である。そしてフォネーとは「自分が語るのを自分で聴く *s'entendre-parler*」仕組みである。とデリダは指摘するのだ。またこの指摘にくわえて、「フォネーの特権・パロールの優位のもとでエクリチュールという契機が抑圧隠蔽されている」というデリダ思想のおそらくもつとも有名なテーゼが、そこであわせて提起されてくるのである。

ただ、こうして簡略なテーゼを掲げるだけでは十分でないだろう。デリダが「声」ないし「フォネーの特権」ということで照準を当てているのはいったいなにか?